

2020.5のブログ：「新実存主義」を読んで

(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index2.html#2005>) の別紙

「新実存主義」を読んで

中所 武司

■この本の読書のきっかけ

朝日新聞の書評「新実存主義 マルクス・ガブリエル（著）」(2020.4.18)が目に留まった。<https://www.asahi.com/articles/DA3S14446050.html>

書評（宇野重規）によれば、この本の特徴は次のようなもの：

- ・人間の心とは何か、という古くて新しい問題に、現在の哲学者が正面から取り組んでいる
- ・心の動きを神経のシナプスの反応によって説明しようとするような、心を脳と同一視する自然科学的なアプローチを批判している
- ・人間が作り出す「意味の場」から世界を捉える立場は、新たな心の哲学を感じさせる

第一次AIブームの時代に、卒業論文・修士論文(1968~1971)で、デカルトの方法序説、ド・ラ・メトリの人間機械論、エンゲルスの弁証法に言及し、人間の思考過程をニューラルネットワークでモデル化した者として、また、1960年代後半の大学紛争の渦中で、実存主義に心惹かれた者として、この本に興味を持った。

■断片的コメント

以下は、この観点からの興味本位のコメントであり、本の要約ではない。

(注)『・・・』の表記は、本文の引用

→★の表記は、私のコメント

●序論 穏健な自然主義と、還元論への人間主義的抵抗

(著者：ジョスラン・マクリュール)

p3『おそらく意識をもたないであろう物理的・生物学的プロセスから、どのようにして欲求、信念、志向のような心的状態が生まれるのか』

→★この時点では、意識が未定義であるが、何らかのブラックボックス的な物理的・生物学的プロセスから、外部から観察可能な、意識のようなものが生じているはず。

p7『私自身はどうかといえば、自然科学の尋常ならざる説明力を踏まえて、実在にかんする哲学的見解の大枠の中に、いわば「穏健な自然主義」を組み込むべきではないかという気がする』

→★これは、序論の著者のジョスラン・マクリュールの立場で、常識的な考えと思える

p9-10『例をあげよう。マラソンの終盤の追い込みでハムストリングに張りを覚えても、そうした場面ではごく当たり前のことだと解釈できる。けれども、地下鉄駅に向かってゆったり歩いているときに同じような張りを感じれば、痛みはもっと深刻で気がかりに思えるだろう。私の筋繊維や神経系、関連する脳領域で起こっていることは、私の信念とは独立している。しかし、私の意識的経験「張りがどう感じられるか」は、そうした物理的性質には還元できない』

→★これは、信念が物理的性質とは独立している例としては不適切ではなかろうか。

マラソンの時にハムストリングの張りが生じることは過去に学習しており、連想記憶レベルの神経系の機能で説明ができる。一方、歩行中に張りを感じれば、過去の連想記憶が働かないので、結果に対する原因・理由が不明という状態になるが、「痛みはもっと深刻で気がかりに思える」ということは、結果に対する原因・理由が不明という状態は注意が必要ということを経験済みなので、＜原因→結果＞の知識に関する神経系のモデル作成は可能と思う。

→★信念とは何かに関してさらなる洞察が必要と思う

●第1章 新実存主義——自然主義の失敗のあとで人間の心をどう考えるか

(著者：マルクス・ガブリエル)

p14『科学を基軸とする文化では、一般に、心的対象なるものの存在は足もとがとても不確かだと考えられている』

『物理的な対象は、合理的な疑問の余地なしに存在するとされている。』

こうした事態を「存在論におけるポスト・デカルト的非対称性」と呼ぼう』

『物理的なものと心的なものどちらかに特権を認めるべき、深い理由があるのか』

→★これは「二つの文化」論争に似ている。

以下の過去のブログ参照：「二つの文化：自然科学と人文科学」

<http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1912d>

p15-16『現代の典型的な科学者は、』

そのような非対称性のレベルで両者がはっきり区別されるという印象も、』

心の科学の進歩にしたがっていずれ消え失せていくだろうと期待する』

『脳の理解が深まれば深まるほど、心と脳を同一視して、われわれの「デカルト的」直感、心と脳は基本的に違うという印象を捨てることが無難に思えるようになる』

→★「心と脳を同一視する」と「心と脳は基本的に違う」ということは
対立概念ではないと思う。これらの概念における心および脳の定義が異なるのでは？

p16『新実存主義とは、「心」という、突き詰めてみれば乱雑そのものというしかない
包括的用語に対応する、一個の現象や実在などありはしないという見解である』

→★この見解は、・・・主義と言わなくても、常識的な考えと思えるのだが

p16『なぜ「心」という雑多な概念にさまざまな現象が包摂されるのだろうか』
『その理由は、いずれの現象も純粹に物理的な世界や動物界の他のメンバーから、
人間が自分を区別しようとする試みに由来していることにある』
『心をもつ生き物というわれわれの自画像は形づくられてきたのだ』

→★人間を他の動物と区別するには、「心」より「思考言語」のほうがわかりやすい
私の修論（1971）の1.1節「心理学から学ぶこと」で下記のような記述がある：
<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

『思考を言語との関係でとらえる研究[5,6]も多いが、まだ体系づけられてない』
『言語を第二信号系として人間の特性に見つけようとしたパブロフ』

p18『私は「宇宙」と「世界」を区別して使う』
『前者は、最良の自然科学が研究する対象領域を指す』
『後者は、仮説として考えられた、あらゆるものを包含する一個の対象領域をいう』
『「あらゆる意味の場からなる意味の場」として理解すべきである』
『「意味の場」(field of sense :FOS)とは、対象領域を指す』

p19『すべてを包含するFOSはない』
『FOSの存在論から導かれるこの帰結を、私は「無世界観」と呼んでいる』

→★否定形の説明ばかりが強調されて、何が言いたいかわからない

p19『心的語彙には、それを取りまとめる不変の統一構造がある』
『この構造を私は「精神」と呼ぶ』
『宇宙に精神の一部、あるいは部分領域が含まれることに注意してほしい』

→★心と似たような記述が続くが、当たり前の話と思う

p20 『むき出しの唯物論の主張はこうだ。存在するのは宇宙だけである』

p21 『むき出しの観念論はこうした一元論を文字通り根本から否定する。
存在するのは心的なものだけ』

→★両者の「存在」という言葉の定義が異なり、対立概念でないと思う

p22 『彼（デカルト）の立場は、掛け値なしの形而上学的二元論（ふたつの実体、すなわちカテゴリーの異なるふたつのものの存在を信じる立場）と形而上学的一元論のあいだを揺れ動いた』

→★デカルトについては、私の卒論（1969）の前文で下記のように引用している：

＜文献 21. デカルト：方法序説、小場瀬訳、角川文庫、1963（原作 1637）＞

<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/soturon.htm>

「我々、人間の肉体に似ていて、道徳的にも可能な限り、我々の行為をまねる機械があるとしても、我々はやはりこれらの機械が、だからといって真の人間ではないことを認識する二つの極めて確かな方法を持っている。（1637 デカルト）」

「今から約 300 年前、動物は機械であると言ったデカルトも、人間の脳を前にしては、神の助けを借りないわけにはいかなかった。」

---卒論の引用終わり---

p25 『往時のマルクスとエンゲルスも人間を中心において弁証法的・史的唯物論の看板をかかげたこと、その狙いは 19 世紀に実証主義とともに登場した素朴な唯物論のイデオロギーと戦うことにあったことを確認しておけば十分であろう』

→★エンゲルスについては、私の卒論（1969）の前文で下記のように引用している：

＜文献 23. エンゲルス：自然の弁証法、田辺訳、岩波文庫、1956（原作 1876）＞

<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/soturon.htm>

「手と言語器官と脳の協同作業によって、各人にあつてのみならず、社会の中でも、人間はますます複雑になっていく諸作業を遂行し、いよいよ高い諸々の目標を自らに課し、かつそれを達成することができるようになった。（1876 エンゲルス）」

「今から約 100 年前、かのエンゲルスも、人間を外からしか見ようとはしなかった」

---卒論の引用終わり---

【I. ギャップの意識】 p26-33

『意識の問題が解決すべき最後の問題の一つとして立ちふさがる』

『ダニエル・デネットの引用：人間の意識は、我々に残されたほぼ最後の神秘』

『デイヴィッド・チャーマーズの引用：意識は最大の謎である』

『ギャップとは、自然の観察者としてのわれわれ人間に立ち現れる事物と、
自然そのものとの徹底した区別である』

→★意識については、いくつかの具体例を含む定義をしておかないと議論が発散する。
私の下記の論文では以下のように定義した。

- ・思考過程のシミュレーション、電子通信学会オートマトン研究会、A70-76 (Dec. 1970)
<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/gakkai7012.html>

<以下、抜粋>

「思考言語に注目し、それを意識の面からとらえ、大脳におけるエネルギー分布の
集中化作用とし、他方、集中したエネルギーの拡散化作用を連想機能として、
これら両作用の交互反復過程を思考過程と考えた」

「思考の基盤には、意識と連想があり、前者を集中関数 g 、後者を拡散関数 f で表現」

「思考の下部構造としての意識、連想のほかに、上部構造としての判断機能の導入が必要」

【II. 自然主義の失敗】 p 33-56

『まず、ごく自然な思考実験を使って、自然主義の正当性を検討する』

『自然科学の知識にもとづいて唯物論が正しいことを立証するのは、実際には不可能だ』

→★長々と唯物論を批判しているが、この情熱が理解できない。

→★ p 47-48 に、ゾンビ（物理的には実際の人間とそっくりのレプリカ）を用いた
次のような唯物論批判の論証の例が記載されている。

（括弧内の論理式は私の追記）

- ① ゾンビを考える
- ② ゾンビを考えられるので、ゾンビ世界は存在する (X)
- ③ 脳と心が同一ならば、脳と心の結びつきは形而上学的に必然である ($A \rightarrow B$)
- ④ 脳と心の結びつきは形而上学的に必然ならば、ゾンビ世界は存在しない ($B \rightarrow \neg X$)
- ⑤ 唯物論が真ならば、脳と心の結びつきは形而上学的に必然である ($Y \rightarrow B$)
- ⑥ ゾンビ世界は存在する (X) \rightarrow $\{(B \rightarrow \neg X) \text{ の対偶} \rightarrow (X \rightarrow \neg B)\} \rightarrow (\neg B)$
- ⑦ 脳と心の結びつきは形而上学的に必然でない ($\neg B$)
- ⑧ 唯物論は偽である $\{(Y \rightarrow B) \text{ の対偶} \rightarrow (\neg B \rightarrow \neg Y)\} \rightarrow (\neg Y)$

【III. 説明機能としての精神】 p57-68

『人間の概念に依存する現象』である人間の心の特徴を「精神」という語で表す
『精神は一個の自然種でも、複数の自然種がかたちづくる複雑な構造体でもなく、
「精神」の現象を指摘するのに用いられる具体的記述を離れては存在すらしない、
なにものかである』
『精神は、行為を説明する文脈で援用される説明構造である』

- ★唯物論への反論を長々と記述する目的が私のような素人にはよくわからない。
「・・・ではない」という否定形の主張が多く、肯定系の主張が少ない。
- ★心や意識について限定的に定義しないでの議論は成立しない。時間の無駄！

【IV. 新実存主義と、心と脳の条件モデル】 p68-78

『新実存主義が標的にするこうした考え方こそ、私が議論の喚起を狙った近著で
「ニューロン中心主義」と呼んだイデオロギーを背後から支えるものだ』
『ニューロン中心主義に二つの軸があると述べた。ニューロン熱とダーウィン炎である』
『ニューロン熱とは、脳を、あるいはより正確には神経回路を、
洗練した心的語彙に対応する自然種と同一視することである』
『ダーウィン炎はそれと関連する病気であり、人間のあらゆる行動を
進化生物学や進化心理学の観点から説明しようとするものだ』

- ★表現があげすぎるのでは？
人間の精神面の現象を神経生理学的観点で分析するのは科学的アプローチであって、
[仮説→検証]のプロセスはイデオロギーとは関係ない。
- ★まして、ニューラルネットワークの研究分野で、深層学習が画像認識に有効なのは
工学的成果であって、人間の認知機能が神経回路網で解明されたわけではない。

『動物の世界の一員である人間は、基本的・本質的に生物学的機械であり、
その目的はわれわれが知るあらゆる生命体と同じである
—こうした考え方は、貧弱なデータを乱暴に一般化しすぎたものでしかない』

- ★学生時代に読んだド・ラ・メトリの「人間機械論」がこの本の文献一覧にないのはなぜ
- ★ド・ラ・メトリについては、私の卒論（1969）の前文で下記のように引用している：
<文献 22. ド・ラ・メトリ：人間機械論、杉訳、岩波文庫、1932（原作 1747）>
<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/soturou.htm>

「人間はきわめて複雑な機械である。一挙にして明らかなる観念を持つことは不可能であり、従ってこれを定義することは不可能である。最も偉大な哲学者たちがアプリオリに、すなわち、いわば精神の翼の力を借らんとして、なしたすべての探究がむなしかったのは正しくこのためである。かくして、アポステリオリに、すなわち、いわば、人体の諸器官を通して、靈魂の姿を見わけようと試みることによって初めて、人間の本質そのものを明確に発見できるとは言わないが、この点に関して可能なる限り、最高度の蓋然性に到達しうるのである。(1747 ド・ラ・メトリ)」

「今から約 200 年前、フランスの医師ド・ラ・メトリは、人間は機械であると考えたが、それを実証しようとするには、あまりに絶望的になっていた。彼は結論を急ぎすぎたのだ」
---引用終わり---

『脳が、・・・、精神という、歴史に開かれた説明構造に加わるための必要条件であることは事実である。けれども、だからといって、精神が自然の秩序の中に座を占めることができるという考えにはならない。現象の一切切切をひとつのフレームワークのなかに収めて、存在の問題を - ひいては実在の問題を - 解決しようとするのは、およそ見当はずれな試みでしかない』

→★結局、これが言いたかっただけのようだが、感情的な否定形の表現ばかりが目立ち、「新実存主義」などと主張するほどの前向きの内容はない、というのが、哲学に関して素人の私の読後感である。

●第2章 ガブリエルによる論駁 (チャールズ・テイラー) p 79-91

『私がここで語っていること - 現実 R1 が私にとってもつ意味が、R2 や R3 など無数の現実の意味にいかにか左右されるか - は、ガブリエルのいう「精神」の領域でしか起こりえないことだ。』

『輪郭のはっきりした実在に焦点を絞る科学には、こうしたことに取り組むことはできない』

→★この著者もガブリエルと同じく自然科学への強いアレルギーがあるようだ。「二つの文化」(自然科学と人文科学) 論争とみると、新鮮味はない。

●第3章 心は「存在する」のか? (ジョスラン・ブノワ) p 93-107

『ガブリエルの言葉を借りれば、精神とは「行為の説明構造」にほかならない』
『そうである以上、活動から離れて精神があるようには思えない』
『精神という概念が当てはまる態度や能力は幅が広く、
そのすべてを「行為」という言葉でとらえることには無理がある』

→★書き出しでは『掛け値なしに共感する』、『基本的な視点も正しい』と言いつつ、
専門家の立場での厳しい批判を述べているが、素人の私にはよくわからない

●第4章 人間の生とその概念 (アンドレーア・ケルン) p109-130

『アリストテレスの「魂」の観念は生命形相の観念であり、・・・三つの種類がある』
『植物的性の形相、動物性の形相、理性的性の形相である』
『動物性を植物的性に何らかの能力が加わったものと考えることが間違っているように、
理性的性を動物性に何らかの能力が加わったものと考えこともやはり誤りといえる』
『人間』という概念の根本的な意味は、そうした理性的な生命形相を表すことにある』

→★著者は、ガブリエルが「人間が動物である」と認めていることの矛盾を詳述している。

●第5章 四人に答える (マルクス・ガブリエル) p131-187

【I. マクリュールに答えて】 p132-141

『人間は何よりも動物である。
その動物性側面をもっと的確に説明してくれるのは自然科学だ』
『人間の心的活動にかんする限り、
心が働くための必要条件の一部は、ニューロンに起きる出来事だ』

→★マルクス・ガブリエルは、人間の心的活動がニューロンの活動を十分条件として
説明されることには我慢がならないようだが、心情的には同情する。
しかし、心的活動とニューロンでは次元が違いすぎて論理的な扱いには無理がある。

【II. テイラーに答えて】 p142-155

『彼と私の間に大きな意見の食い違いはなさそうだ』
『人間の生における意味の役割が強調される』
『意味の土台は、人間社会において、各自の行為の目的を互いに理解することにある』
『意味は言語の使用と結びついている。そして、言語の使用には歴史がある』

→★ここでの言語は、コミュニケーション言語が想定されているが、人間の生の意味を考えると時の思考言語のほうが、より本質的と思う。

『「すべてを知っている」ということを自然科学だけにもとづいて知ることはできない』
『おまけに、宇宙について知るべきすべての事実をわれわれが決して知りえないことは、自然科学を通して知ることができる』

→★連続するこれら二つのフレーズは、論理的というよりも感情的表現に思える。
なぜなら、第2のフレーズが真ならば、必然的に第1のフレーズは真となる。
第2フレーズの真と第1フレーズの偽（真でない）は矛盾するから。

【III. ブノワに答えて】 p155-168

『精神が物理的なものに尽くされないということは、アプリアリな概念的真理だと思う』
『「心」や「意識」をはじめとする心的語彙の多くは、・・・包括的な用語である』
『私が精神と自然を区別する基準は、結局のところ、
自然の成り立ちはわれわれの信念によっては決まらないのに対して、
精神の成り立ちは決まるという考えに帰着すると言っていい』

→★マルクス・ガブリエルは、人間の精神は自然科学で解明しつくせないものという信念をもっており、「新実存主義」による説得を試みているということかな。

【IV. ケルンに答えて】 p169-187

『今の話題と関連するが、われわれの動物側面にはいろいろな見方がある』
『一連の現代的な見方は18世紀から19世紀にかけて登場したが、
論者の間には、当時もいまも大きな意見の食い違いがある』

→★すでに個別に引用済みであるが、私の卒論（1969）の序文では次の3件を引用した：
（デカルトの動物機械論は17世紀なので「一連の現代的な見方」からはずれるが）

<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/soturou.htm>

1637：デカルト「方法叙説」

1747：ド・ラ・メトリ「人間機械論」

1876：エンゲルス「自然の弁証法」

『われわれが一種の動物であるという事実（なるもの）によって人間性をとらえなくても、人間は自分について考えられる』

→★デカルトも「我思う、ゆえに我あり」と言っている

→★私の修論（1971）の終章では、自分の思考過程を考えて、次の感想を残している：

<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

思考は、人間の所有物でありながら、それは所有権なき所有であって、我々は、それを支配することはできない。これを何とか手中に収めたいという欲求にかられて、こうした研究に携わったのであるが、意に反し、振り返りにあった感が強い。それは、内観作業に頼りすぎたためかもしれない。

しかし、行動主義心理学者のようにその客観性を重んじて人間をブラックボックスと考え、その行動だけを研究対象とすることによって、ブラックボックスのメカニズムにこそ興味を持つ我々がえることのできる手がかりが不十分であるとすれば、やはり、内観も、一つの重要な手段としないわけにはいかない。

いずれにせよ、思考についての研究が、その思考によって行われるというジレンマから逃れることができないとすれば、我々はすでに第1歩からつまづいていることになる。研究主体が同時に研究対象であるという特異な分野の困難さをつくづくと感じたのではあった。

■読後感

→★卒業論文・修士論文（1968～1971）における、

人間の思考過程をニューラルネットワークでモデル化して

コンピュータでシミュレーションするという研究は、

マルクス・ガブリエルの攻撃対象そのものということになるが、

もちろん、その時も今も、人間の心をコンピュータで解明しつくせるとは思っていない。

→★学生時代に、よくわからないまま「実存主義」に興味を抱いた者として

本書の「新実存主義」はあまり興奮を呼び起こすものではなかった。

以上
